

酪農経営移譲支度金を交付

父から子へ3名の組合員が酪農経営移譲を実現

組合は、後継者の自主・自立を掲げ、今後の酪農生産基盤で活躍頂けることを願って、「酪農経営移譲支度金制度」を新設しました。

このほど、隅屋寒三専務が二月十三日に楨元昌富さん(三原市久井町)、一月十四日に砂子拓也さん(山県郡北広島町)、三月八日に井上正芳さん(安芸高田市甲田町)を訪問し、今後の抱負を聴くとともに激励の言葉を添え、酪農経営移譲支度金を手交しました。

これからも頑張ります!!

楨元さんご夫妻



真理さん 昌富さん

牛も人間も8割の力で余裕を持った飼養管理をしてほしい

砂子さん



父・理文さん 拓也さん

父母の牧場経営に追いつくよう頑張りたい。早くパートナーを見つけ両親を安心させたい

井上さん



父・芳樹さん 正芳さん

余裕を持った楽農(楽しく)を目指してほしい。早くお嫁さんをみつけてほしい。孫の世話をしたい

父が始めた酪農を継ぐのが夢だった。儲かる楽農を目指し両親に早く孫を抱いてもらいたい

日々徒然 かがやき



▼三月六日〜九日にかけて生乳生産管理チェックシートの様式変更に伴う組合員説明会を開催した。

▼この生乳生産管理チェックシートはかねてより組合員の皆さんから、記帳が難しい、ページの切り離しは出来ないのか、記帳内容を簡素に出来ないのか、との多くの意見を受け様式が変更されたものである。

▼チェックシートの記帳・記録・保管の取り組みが平成十八年度にスタートして、はや五年が経過。しかし、組合は当初100%の記帳を目指して組合員に協力を求めてきたが、現段階でも七十五・四%程度と徹底が図られていない状況にある。

▼そもそも記帳・記録は努力義務ではあるが、全国的な取り組みとして記帳が定着している。取り組みの導入にあたっては、消費者への安全・安心を担保する、生産・製造・流通のそれぞれの段階での一義的責任を果たす役割を示すものとされ、一連の工程の中で、何れ

かがこの記帳・記録を怠れば、全ての工程で安全・安心を保証するものが無いとして、記帳・記録が無い段階での責任が生じることとなる。既に、記帳・記録が無い場合は生乳廃棄等にかかる保険適用除外といった案件もある。

▼記帳・記録は消費者だけを意識したものではなく、記帳する酪農家側にもメリットがある。搾乳機器等の洗浄やバルククーラーのスィッチの入れ忘れ、抗生物質の投与等の記録内容から、生乳廃棄の事故につながる「うっかりミス」を未然に防ぐこともある。

▼組合では、中期計画に全組合員の生乳生産管理チェックシートへの記帳を掲げており、周知を図っている。現在、記帳されていない方を含め、四月一日を一つの節目として、新様式で新たな気持ちで記帳をお願いする。牛乳、乳製品となる食品(生乳)を生産する酪農家。その食品を最終的に消費する消費者。その消費者に対して自らの安全・安心を、胸を張って証明する証として記帳・記録の徹底をお願いする。



山陽乳業(株)社員親睦旅行 今日の我が社があるのは・・・



箱根芦ノ湖「海賊船」をバックに記念撮影

広酪の子会社「山陽乳業(株)」では、箱根・伊東・鎌倉への社員親睦旅行を企画。
同社社員は業務活動に支障を来さぬよう四つの班に分かれて参加した。
広酪は旅行への同行を求められ、第三班に西中参事が、第四班に隅屋専務が参加した。
同社の木原社長ほか常勤役員は、それぞれ何れかの班に加わり参加された。

今回の旅行は、平成二十年に十数年振りに社員親睦旅行を再開して以来、四年連続の開催となった。

第三班に参加した高畦常務取締役は、参加社員を前にして「今日の我が社があるのは、親会社『広酪』を構成する酪農家の皆様による平成十七年度の資本政策の実現とともに、社員の皆さんの頑張りがある。未だ、再建途上にあるが、社員の皆さんは株式会社として理念・使命を果たすことを心に止め、頑張り期待する。来年度は、原料諸資材高騰など厳しい状況にあるが、また旅行が実現出来ることを励みに頑張つてほしい」と述べた。

社員は、日常は挨拶を交わす程度で、深い話をする機会に恵まれていない中、この旅行は社員同士の笑顔につつまれ、会話も弾み、人間関係の潤滑剤となっているようだ。

今回の社員親睦旅行が改めて機会となつて、同社の理念「消費者の『安全』と酪農生産者の酪農に賭ける『夢・情熱・希望』をつなぐ架け橋となります」に通じるよう期待する。

○今月の表紙



本誌の表紙写真をご欄になられた感想は如何ですか。

写真は、去る三月四日(五日の両日)に参加した山陽乳業(株)の社員親睦旅行の訪問先「鎌倉」で「鎌倉の大仏様」を背後から撮影(三月五日、雨中)したものです。皆さんも背後からの撮影写真を目にすることは比較的少ないものと思えます。

背中をもじった表現には「背中で物を語る」、「子は親の背中を見て育つ」などがあります。後者の表現は、広酪組織に例えると親は組合員、つまり「酪農家」となるものと考えますが如何でしょうか。

人は、それぞれの職業、職域においてそれぞれの立場があり、鎌倉の大仏の背中から「親の背中」について、様々に思いが巡り一考する機会を得ました。
さて、鎌倉の大仏は鎌倉を代表する名所となっています。長谷の高徳院の本尊である大仏は、鎌倉幕府第三代執権・北条泰時の晩年になってから作り始められ、北条泰時の時代に、浄光という僧が諸国を勧進して浄財を集めて歩き、千二百三十八年三月から大仏と大仏殿を造り始め、北条泰時もその建立に援助をしたとあります。

大仏開眼は、今から遡ること約七百七十年前とされ、本尊の大仏は阿弥陀如来。阿弥陀如来の高さは十二・三・八m、総重量は百二十一トンで、近くで見るとその荘厳さに惹かれました。
この大仏は、地下通路口から二十円を支払い、腹の中を見学することが出来ます。この旅行で大仏様の腹を探ることが出来ました。大仏様の腹の中に入ると「酪農家、関係者の皆様の幸せを願う」と語ってくれました。

改めて、現代のように重機の無い古の時代に、よくぞ、この様な大仏が建立されたものに関心するとともに、現代社会、農業・政治・経済と難関山積み状態に晒される中、大仏様を背後から眺めることで、多くのヒントを得られるような気持ちに浸りました。
これが、悟りの境地なのでしょう(合掌)。